

要領の得ない点も多々あろうかと思いますが、御容赦下さい。 (浦幌町立厚内小学校教頭)

参考文献

『牧野新日本植物図鑑』

『理化教育現代化講座』(道立理科センター)

『小柳省三氏研究集録』

1916(大正5)年8月15日の大火と街並み形成

鈴木智子・後藤秀彦

I. はじめに

1900(明治33)年を開基とし、本年80周年を迎えた我町「浦幌町」も過去数度の大きな災害を被っている。中でも、開村間もない1916(大正5)年の市街地大火と1952(昭和27)年の十勝沖地震は未曾有の被害を及ぼし、現在でも町民の語り草となっている。この2件の災害は、時折農耕地等を襲った洪水と異なり、中心市街を直撃した点に特徴があると言えよう。

また、1916年の大火と1952年の十勝沖地震とを比較したとき、後者はその資料が比較的整っているのに対し、前者の資料は皆無に近く、間宮不二雄が『浦幌村五十年沿革史』の中でわずかに触れているだけであり、この大火を直接体験した人達も高齢となって調査研究の行き届かない面が多々あった。

筆者ら浦幌町郷土史研究会では、会創設当初からこの点に着目し、調査をすすめ「昭和54年度浦幌町郷土博物館特別展」の際『大正5年のうらほろの街並み形成』と題して、その調査の一端を公表したところであるが、その後も町内外各氏から資料の提供を賜わり、ようやく発表できる段階に入ったので、ここにその結果を公表する次第である。

大火の発生した頃、すなわち1916年頃の浦幌は1903(明治36)年12月25日に開業した釧路線浦幌駅(釧路鉄道管理局、1972)周辺に旧生剛市街からの転居者が相次ぎ、駅前通りを直線としそこからT字形に家が建ち並び、その戸数も60戸を数えるに至った時期と言われている(間宮、1949)。

1916年8月15日の大火は、この未来に向って歩き始めた最初の大きな試練であった。その後、1918年1月7日午前にも村役場の火事(間宮、1949)もあったが与えた被害の大きさは比較にならなか

ったと言える。この2度の大火で1918年以前の貴重な資料、特に行政文書の殆どは灰燼と帰してしまった。したがって、本町の開村前後の歴史を探ろうとするとき、基本的史料の不足が決定的致命となって非常な困難を余儀なくしている。

筆者らは、この小文でこの大火のあらましとこのとき被災された方々を中心として当時の街並み形成の概要を述べてみようと思う。

なお、この報文をまとめるにあたり高松與次郎・中川政雄・吉川利昌・北村慶蔵・斎藤有・山本きの・黒川とみの各氏に貴重なお話しを伺がい、また帶広市新田正雄・浦幌町福原仁子の各氏には文献等のご紹介をいただいた。ここに銘記して感謝申し上げる。

II. 1916(大正5)年8月15日の大火について

この大火について触れている史料は、管見の範囲ではFig. 1に示した『北海タイムス』(現・北海道新聞)の報道記事と『浦幌村五十年沿革史』(間宮、1949)があるだけである。『北海タイムス』では、この大火の模様を翌々日の8月17日に次のように報道している。

浦幌大火

▶ うら盆の灯から

▶ 43戸を焼失

一昨日午後八時半浦幌停車場通木材人夫頭清水金次郎方より発火し折柄南東の風烈しく見る見る一瞬火炎に包まれ井水の不備と消防設備なきとに依り見す見す郵便局営林区駐在署を舐め盡し停車場前角久保田運送店まで四十三戸焼失し翌午前一時鎮火したり原因はうら盆の事とて盆棚に灯を上げたるより起りし者なり池田分署長等直に出張して村長其他有志と計り炊出しを為し一方小屋掛け

一十三百二十九第

日七十月八年五正大

ス ム イ 大 海

遊覽團の出發

しゅつ はづ

(誤カ)

札幌出發より苦小牧迄

●松平伯爵一行

火災の見送り

Fig. 1 1916 (大正5) 年8月17日付けの「北海タイムス」記事

避難設備を為せり人畜に異状なく損害取調中なれども目貫の商店全部焼失したれば総額十萬圓位なむむ（池田電報）
(筆者註・原文縦書)

また、『浦幌村五十年沿革史』では次のように記載している。

「大正5年8月15日（1916）夕刻浦幌市街停車場通り石田彌吉氏隣宅で、出稼中の大工清水某の留守宅から出火して、60戸を焼失した。原因は丁度その日が孟蘭盆の中日であったので、佛壇にあげてあった燈明から佛具に燃え移ったのであった生憎家人が不在中であったため遂に大事に至ったものと云われる。當時はポンプは勿論井戸さえ僅かに通筋に2、3個しかなかったので、火の手の廻りは早く、附近の者は家財の搬出避難に忙しく、そのため延焼区域は拡大して行った。」

この日停車場通りの○座は新築成り落成初日の

蓋を開ける豫定で、内部は尚大工が雑作の手仕舞仕事の最中であったが、既に芝居の役者一行は到着して道具衣装等をひろげ、見物席も既に観客が相當入っていたので、一度火事と聞き、一同は非常に驚い、一時は大混雑になったが別に負傷者も出なかたのは幸であった。」

以上、この二つの史料には符合するいくつかの点と矛盾するいくつかの点が認められる。もちろん、この二つの史料のうち前者は大火の翌々日に新聞記事として報道されたものであり、後者は大火から33年後に書かれたものであるから、いくつかの誤認あるいは誤伝聞をもとに書かれた可能性が全くないとは言えない。

については、二つの史料を並べて両者がどのようにおののの点について記述しているかを比較し

てみようと思う。以下、『北海タイムス』については「新聞」と『浦幌村五十年沿革史』については「沿革史」と略記する。

①大火のあった月日及び時刻

- ・1916（大正5）年8月15日午後8時半出火
(新聞)
- ・1916（大正5）年8月15日夕刻出火(沿革史)

②出火場所

- ・浦幌停車場通木材人夫頭清水金次郎宅(新聞)
- ・浦幌市街停車場通り石田彌吉氏隣家の出稼中
の大工清水某の留守宅 (沿革史)

③天候

- ・南東の風烈しく…… (新聞)
- ・記載なし (沿革史)

④出火原因

- ・盆の事とて盆棚に灯を上げたるより起りし者
(新聞)
- ・佛壇に上げてあった燈明から佛具に燃え移つ
た (沿革史)

⑤焼失家屋数

- ・43戸 (新聞)
- ・60戸 (沿革史)

⑥被害額

- ・約 100,000円 (新聞)
- ・記載なし (沿革史)

⑦当時の消防設備

- ・井戸の不備と消防設備なき…… (新聞)
- ・ポンプは勿論井戸さえ僅かに通筋に2、3個
しかなかった (沿革史)

⑧死傷者

- ・人畜に異状なく…… (新聞)
- ・……負傷者も出なかった…… (沿革史)

⑨鎮火時刻

- ・1916年8月16日午後1時 (新聞)
- ・記載なし (沿革史)

⑩その他

- ・池田分署長等直ちに出張して村長其他有志と
計り炊出しを為し一方小屋掛け避難設備を為
せり (新聞)
- ・この日停車場通りの⑪座は新築成り落成初日
の蓋を開ける豫定で、内部は尚大工が雑作の
手仕舞仕事の最中であったが、既に芝居の役
者一行は到着して道具衣装等をひろげ、見物
席も既に観客が相當入っていた (沿革史)

以上のように一致する点と相違する点とが多々見受けられるが、これらについて高松與次郎氏等からの聞き採り調査を参考にしながら、事実は一体どうであったのかを検証してみよう。

まず、大火のあった日は8月15日と相違はないが、出火時刻については隔りがある。新聞報道は午後8時半としているのに対し、一方の「沿革史」は夕刻といっている。この夕刻という時間設定は後段の「…既に芝居の役者一行は到着して道具衣装等をひろげ、見物席も既に観客が相當入っていた…」という記述につながり、芝居の幕明け前の時刻を推測させるが、これらについて高松氏らは「…芝居小屋ではちょうど『三番叟』が終り、幕の降りたとき…」と言っているところから、夕刻に芝居の幕が開き、その直後に出来したと考えるのが適当であろう。それに、「三番叟」は歌舞伎の顔見世、正月の仕初め式、劇場の新築開場式などに舞うものであり、この劇場の柿落しの日であった8月15日の幕明けの祝事として行なわれたことは想像に難くない。そうすると、幕明け第一番目の出し物として『三番叟』が舞われたこととなり、「沿革史」の「夕刻」が特定の時間を指すものではないが、この直後に出来したと考えても矛盾はないと考える。

出火場所とされている清水金次郎宅は浦幌町駅前通りにあったことは明白であるが、この人物の詳細については全く不明である。「沿革史」が言うように「出稼中の大工」で「寄留人」として短期間浦幌に在住していたものと思われる。

延焼範囲の広がった要素の一つである天候について新聞は「…折柄南東の風烈しく…」と記している。しかし、高松氏らは「大きな火柱が一本夜空に舞うように、高く上っていた」と言っている。この証言は、無風状態を指すものと解釈できるがにわかには判断しがたい。それは、激しい南東の風が吹いていたにもかかわらず、延焼範囲がほぼ出火地点を中心に広がっていることによる。風向きと家の配置及び家の造作が火事の時、どんな有機的関連をもって延焼していくのか、立証する知識はないが、この年の天候は異常であったらしく高松氏らも「この年の例年には日照り続きの年でした。下水の水も干上がって水は一滴もありませんでした。道端の草も枯れる寸前のようにしおれていたと思います…」と述べている。この高松

年	月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
1880(明13)		-4.3	-4.7	-0.1	2.9	7.2	9.8	15.1	20.8	15.5	11.0	4.4	-0.3	6.4
1881(明14)		-2.3	-4.1	-2.8	1.6	8.5	11.9	13.1	17.2	16.4	10.2	5.0	-1.7	6.1
1882(明15)		-3.1	-2.9	-0.9	3.8	6.9	10.8	16.4	20.2	16.4	10.7	3.0	-2.2	6.6
1883(明16)		-5.1	-6.8	-2.1	2.4	5.7	10.9	17.7	19.9	16.5	12.0	4.7	-0.8	6.3
1884(明17)		-4.7	-6.6	-3.6	1.5	6.2	9.1	14.8	16.5	14.3	9.5	1.8	-3.2	4.6
1885(明18)		-6.9	-7.1	-4.2	1.5	5.7	10.6	13.4	17.0	14.1	10.1	5.2	1.1	5.0
1886(明19)		-3.5	-3.8	-0.5	4.2	7.4	11.5	15.6	19.8	16.7	11.8	4.4	-0.6	6.9
1887(明20)		-4.8	-3.2	-1.4	2.8	5.0	8.0	14.8	18.8	15.2	10.6	5.9	0.3	6.0
1888(明21)		-4.1	-5.4	-1.6	3.2	7.6	7.0	15.6	17.4	14.7	10.8	5.8	-1.1	5.8
1889(明22)		-6.3	-6.1	-2.7	2.4	5.0	9.5	14.1	18.2	14.3	8.9	3.0	-1.7	4.9
1890(明23)		-6.1	-4.3	-1.2	5.0	8.2	10.5	15.2	19.4	18.5	10.9	5.8	2.4	7.0
1891(明24)		-5.3	-5.2	0.5	3.7	8.5	10.0	14.6	17.1	16.1	10.7	4.3	-0.7	6.2
1892(明25)		-5.2	-4.7	-3.6	2.8	7.0	11.3	17.1	17.3	17.4	11.2	3.6	-3.2	5.9
1893(明26)		-5.2	-6.7	-1.5	2.3	5.3	10.2	13.1	17.3	14.8	10.8	5.2	-0.7	5.4
1894(明27)		-3.8	-3.7	-1.3	3.3	5.1	13.0	15.4	17.8	14.7	9.7	5.5	-1.1	6.2
1895(明28)		-5.1	-4.1	-4.3	3.3	8.0	8.8	12.5	15.8	15.6	11.2	3.4	-0.5	5.4
1896(明29)		-4.1	-5.8	-3.2	4.0	7.8	10.3	14.1	17.7	14.4	9.6	4.9	-1.3	5.7
1897(明30)		-4.7	-4.9	-3.9	0.8	5.6	7.7	13.0	17.0	15.0	10.0	4.0	-4.1	4.6
1898(明31)		-5.7	-6.6	-6.6	2.4	5.5	8.9	14.5	16.4	12.4	9.6	4.2	-0.4	4.5
1899(明32)		-3.3	-4.7	-2.5	3.7	7.5	10.5	14.5	15.4	14.5	10.9	3.9	-1.5	5.8
1900(明33)		-6.2	-8.0	-0.5	2.3	7.2	9.5	12.5	18.2	15.6	11.5	5.3	-1.5	5.2
1901(明34)		-4.7	-4.3	-1.5	3.4	7.2	9.0	14.1	17.9	14.8	10.4	4.5	-2.1	5.7
1902(明35)		-7.4	-6.9	-2.5	2.6	5.5	8.4	12.0	14.6	15.1	10.9	5.2	1.0	4.9
1903(明36)		-0.7	-3.8	-0.1	4.3	6.1	9.4	13.6	15.9	15.7	10.1	4.1	-2.7	6.0
1904(明37)		-5.8	-3.6	-1.6	3.4	8.5	13.1	16.4	18.5	14.9	10.5	3.4	-1.1	6.4
1905(明38)		-4.6	-8.4	-3.8	0.4	6.6	9.7	14.4	14.7	15.2	10.5	4.4	-0.5	5.0
1906(明39)		-5.2	-7.4	-3.1	2.3	6.3	8.5	14.3	15.7	14.9	10.4	2.0	-1.8	4.7
1907(明40)		-4.7	-5.1	-2.8	3.7	7.1	9.9	13.0	17.5	14.7	9.6	3.7	-3.7	5.2
1908(明41)		-9.0	-7.9	-3.3	3.0	4.7	9.1	11.1	17.8	13.1	10.5	2.4	-2.7	4.1
1909(明42)		-8.4	-7.9	-3.8	3.6	5.7	10.5	14.5	16.9	15.5	9.4	4.5	-2.2	4.9
1910(明43)		-3.3	-5.2	-2.5	2.7	6.8	10.1	13.3	16.3	14.4	10.9	4.0	-3.8	5.3
1911(明44)		-5.5	-5.6	-1.9	3.3	8.9	11.2	14.1	15.9	14.9	10.7	6.3	-1.8	5.9
1912(大元)		-4.6	-4.3	-1.9	2.0	5.7	8.7	13.0	15.6	12.9	9.0	1.5	-4.0	4.5
1913(大2)		-8.5	-6.9	-4.1	3.5	5.2	7.8	11.8	14.2	12.8	9.0	3.2	-2.5	3.8
1914(大3)		-2.7	-5.4	-0.4	1.6	7.4	11.0	14.2	16.1	14.9	10.6	6.0	-2.1	5.9
1915(大4)		-6.0	-4.0	-2.5	1.4	3.8	10.1	12.4	16.5	16.7	11.4	4.4	-0.5	5.3
1916(大5)		-4.1	-4.4	-2.0	2.7	5.4	11.7	16.8	20.0	16.4	11.3	5.9	-0.3	6.6

Table 1 1880年～1916年の平均気温（河野、1918）

氏らの証言を裏付ける浦幌の気象に関するデータはないが、1879（明治12）年7月に設置された根室測候所の気温に関するデータには興味がある。

Table 1に示した表は1880（明治13）年から1916

（大正5）年に至る各月及び年の平均気温表である。この表中、1916（大正5）年8月の平均気温は20.0°Cである。この気温、観測を開始した1880（明治13）年以来1916（大正5）年に至る37年間

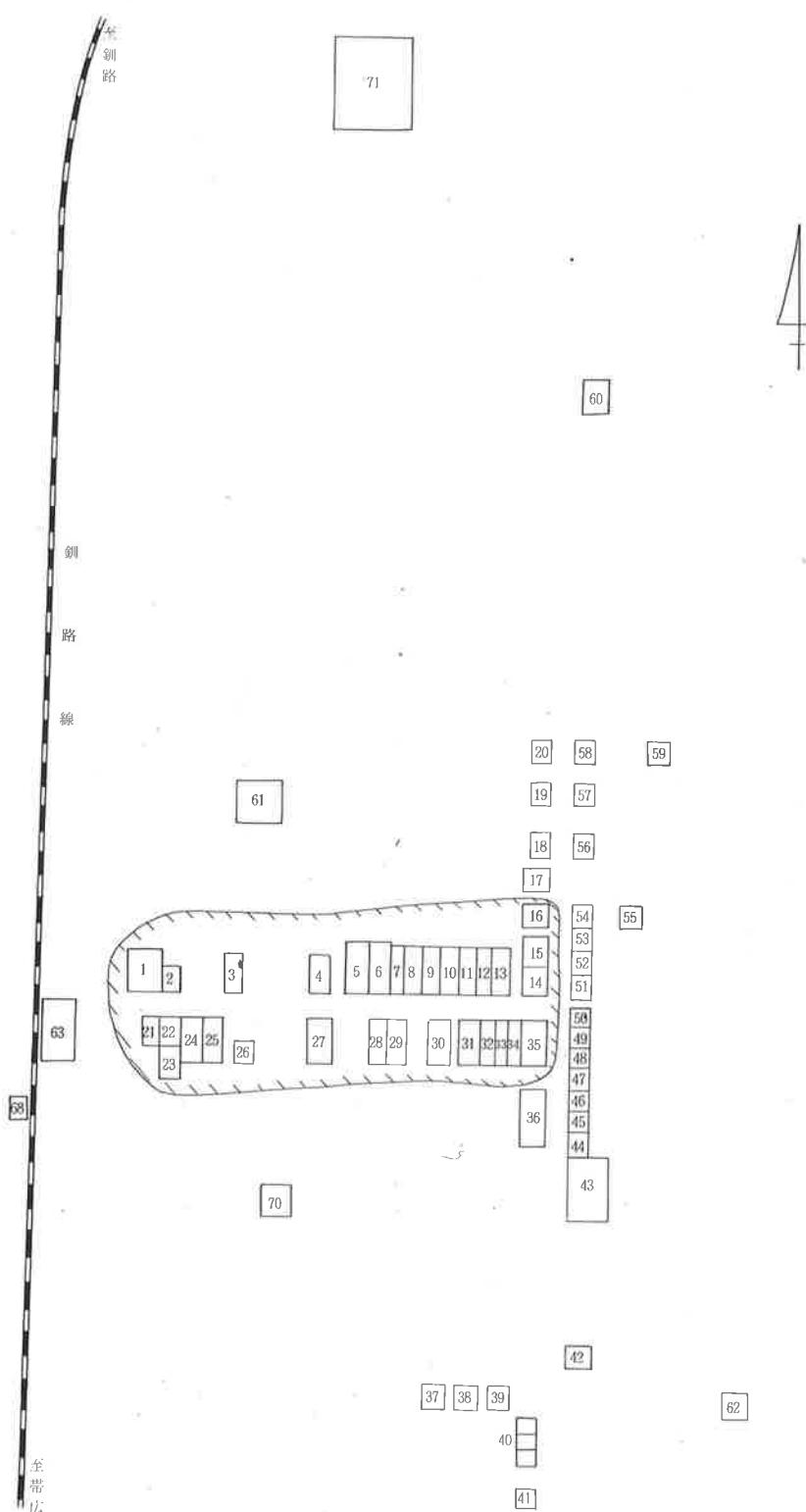


Fig. 2 1916年8月15日の街並み概略図

中、1880年及び1882年に次ぐ第3位の高温を示すものである。因みに1880～1915年の8月の平均気温は17.2℃となり、この1916年の気温と2.8℃も差がある。また、その前月の7月の気温は観測史上最高の16.8℃を記録している。このデータから浦幌の気温は根室より更に高かったと考えられ、高松氏らの気憶は正確と言える。そして、干魃ぎみのこの年の気候が、出火後の消防体制に重大な影響を与えたことは否めない事実であり、井戸の極めて少なかった浦幌の地勢がそれに拍車をかけたであろうことは容易に推測できる。

さて、最も問題となるのは焼失家屋数である。新聞では43戸とし、「沿革史」では60戸と記述している。焼失範囲が必ずしも明確ではなく、当時浦幌市街の戸数が何戸であったのか知るすべもないが、少なくともこの大火の起きた時点で43戸あるいは60戸を上まわる数の家屋が、浦幌駅前通りを中心に軒を並べていたことは事実であろう。これについては、次項で当時の居住者を知れる範囲で紹介しながら検証していきたい。

III. 大火の日現在の居住者

この大火のあった当日、すなわち1916（大正5）年8月15日に浦幌に在住していた人々は調査の結果次のようになつた。また、これら以外にも短期間寄留し、出稼していた人もいたと思われる。

①久保田要吉（久保田運送店・久保田旅館）

久保田要吉（先代）は新潟県の出身で、根室和田村に屯田兵として入植したが、その後旧生剛市街に居住し、大工や旅館を開業していた。浦幌駅が開業すると直ちに、現在の米沢一喜氏宅附近に移転し、旅館業を営むとともに後には運送業も始めた。傍ら、村會議員・商工会長・消防組頭・衛生組合長・浦幌神社氏子総代・淨福寺檀家総代などを歴任している（問宮、1949）。

②倉庫

③下浦幌駅通所（吉川一馬）

福島県出身。北海道庁の役人生活後、旧生剛村に転住し、下浦幌駅通所を開設。浦幌駅開業とともに現本町吉川利昌に転居した。その間、生剛外二村総代人・村會議員などを務めた（問宮、1949）。

④真木 某

現「かし和屋」附近。

⑤飛田辰次郎

愛知県出身。幕別町から浦幌へ転じ開墾に当っていたが、1912（明治45）年現本町飛田林平宅に転住、雜穀仲介業を営んでいた。消防組頭などを務めている（問宮、1949）。

⑥相場政衛（金物商）

長野県出身。足寄を経て浦幌へ転住。1914（大正3）年刊『十勝案内』には「和洋、金物、雜貨商」として巻末に広告が掲載されている。現本町石田パーマ附近。

⑦根本高三郎（呉服商）

宮城県出身。現本町石田パーマ附近。

⑧関口清作（大工）

木古内から転住。現本町石田パーマ附近。

⑨豊吉種吉（運送）

⑩宮川 某（床屋）

⑪高澤 某（杁屋）

⑫山川 某（豆腐屋）

⑬不詳 （仏具屋）

⑭川口忠助（雜貨商）

『十勝史』（酒井、1907）の巻末広告には「生剛村大字浦幌 雜貨商川口忠助」とある。現本町高室栄三氏宅附近。

⑮佐野継次郎

岐阜県出身。消防組小頭・東禪寺檀家総代等を務め、住居は現本町舛井時計店附近。

⑯料理店

浦幌印刷附近。

⑰青木里き

岐阜県出身

⑱十鍛冶屋

⑲鈴木（料理屋）

⑳永沼

㉑美濃屋（旅館業）

佐野政藏経営。

㉒木越 某

㉓君 貞次

江別から転籍。現本町鈴木商店附近。開村以前から「十勝郡各村、中川郡旅来外十四ヶ村総代人」等として村政の中心に位置していた。又、土田農場の経営にも参画していた（問宮、1949）。

㉔高室廣助

広島県出身。1914（大正3）年、現本町桑原新聞店附近に移住。㉕座の所有者。雜貨商。

㉖劇場

㉙曹洞宗浦幌説教所

現・東禪寺の前身。大正初期の設置と伝えられる。

㉚清水金次郎（木材人ヲ頭又は大工）

大火の火元であること以外詳細不明。

㉛山形屋（雜貨業）山形六郎左衛門

現本町の石田東栄堂附近。1914（大正3）年刊の『十勝案内』には次の屋号で「国定教科書・学用品・新聞」を扱う「山形本店」として広告が掲載されている。なお、ここでいう新聞とは「北海タイムス」（現、北海道新聞）である。

㉜大屋

郵便局長。

㉝錢湯（美濃屋が経営）

㉞勝田秀一（ソバ屋）

佐賀県出身。現本町斎川運動具店附近。

㉟杉江 某（食堂）

㉟不 詳（人夫）

㉟中山岩吉（菓子屋）

現、本町中山薬局附近。

㉟脇田貞吉

岐阜県出身。その他不詳。

㉟森 某（建具屋）

㉟中山熊次郎

山梨県出身。

㉟金田庄次郎

㉟守屋 晋（獣医）

香川県出身。当初旧生剛市街で開業していたが浦幌へ転居（安藤・後藤、1978）。

㉟役場官舎

村助役（川崎八十八）、収入役（宅美熊吉）ほか1軒。

㉟井上吉衛（第10代村長）

㉟斎藤 某（医師）

㉟役場

㉟的野 某（浦幌巡查駐在所巡查）

㉟北村卯吉（雜貨商）

㉟借屋（中山熊次郎商店経営）

㉟藤川富士次（雜貨商）

㉟黒川常行（黒川松山堂）

㉟石田 某（呉服商）

㉟田中長松（呉服商）

㉟佐々木卯三郎（豆腐店）

㉟不 詳（料理店）

㉟斎藤 某

「水汲みサイトウ」と呼ばれ、市街地へ水を運搬し、生計をたてていた。

㉟大和田 某（大工）

㉟渡辺 某

㉟三原亀太郎（金物商、鍛冶屋）

㉟丹羽 某

㉟澤田巳之助（料理屋）

㉟川原 某

㉟笹原 某

㉟真宗本派本願寺派淨福寺

1905（明治38）年設立。1908（明治41）年現在地へ移転（間宮、1949）。

㉟真宗大谷派謙敬寺

1897（明治30）年設立。1912（大正元）年現在地へ移転（間宮、1949）。

㉟浦幌駅

㉟田中 某

㉟大宮 某

㉟斎藤 某

㉟菅野 某

㉟斎藤織平

㉟囚人看守官舎

㉟小野寺倉之助

㉟第二浦幌尋常高等小学校

以上のように71の民家・公共建物・社寺が判明した。もちろん、調査の不備や記憶の違いなどから誤認している点や漏れている点もあると思われるが、少なくともこの71をいくらか上まわる数の家並みがあったことは間違いないであろう。この中で、大火の被害を受けたものは①～⑯、㉑～㉕の計31戸である。我々が調査した家の数71の約44%が罹災世帯ということになる。しかし、新聞報道の43戸、「沿革史」の60戸とくらべてあまりにも少ない数であると言わなければならない。31戸、43戸、60戸のどの数が得たものであるか断定するに足る第三の史料は持ち合せていないが、71戸中60戸という数は少なくとも信じがたく、市街地の全滅を意味するものである。新聞によれば「…目貫の商店全部焼失したれば…」と表現しているところから、現本町の駅前通りを焼失したものと考えられ、駅前通りだけで43戸、60戸という数は多すぎるものと言える。因みに、現在駅前通りに

面して軒を並べている家の数は北側、南側合計して29軒である。

したがって、本大火で焼失した家の数は30~40戸と推定され、母屋のほかの附属建物（物置、畜舎等）を含めても60戸という数字には達しないであろう。

また、浦幌市街に形成されていた家並みは71+Xの数が求められる。このXの数字は寄留者や短期の出稼人達の戸数であるが、この数を知る手掛りはない。ただ、「出入寄留者戸籍及人口」（間宮、1949）によれば「入寄留者」の数が年を追うごとに多くなっており、相手な数に達するものと思われる。

IV. おわりに

1916（大正5）年8月15日に発生した本町未曾有の大火について知れるところを記してきた。農村経済に永い間依存してきた草創期の本町が、4年に1度必ず冷害か凶作に襲われるといわれているにもかかわらず、この大火後短期間に復興したという（間宮、1949）。それは、1912（大正元）年、1913（大正2）年の冷害・虫害、1914（大正

3）年の洪水後、1919（大正8）年の洪水まで豊作だった（前出ほか、1969）ほかに第一次世界大戦勃発に伴なう雑穀の高騰が背景にあったであろう。

なお、この大火を契機に「消防組」が発足したが、この推移は『浦幌村五十年沿革史』に詳しい。

（浦幌町郷土史研究会員・浦幌町郷土博物館学芸員）

引用文献

- 安藤龍逸・後藤秀彦（1978）「生剛村旧市街の街並み形成について」『浦幌町郷土博物館報告』12 浦幌
 鉄路鉄道管理局（1972）『鉄路鉄道管理局史』
 鉄路
 河野常吉（1918）『北海道史附録』 札幌（『河野常吉著作集別巻I』所収 札幌）
 酒井章太郎（1907）『十勝史』 帯広
 前出重雄・藤平利美・松本和夫・荒川秀雄・及川勝（1969）『くみあい史』 浦幌
 間宮不二雄（1949）『浦幌村五十年沿革史』 浦幌

十勝地域考古学関係文献目録

— 1861～1980 —

佐藤訓敏 編

凡例

- I. この文献目録は1861（文久元）年以降1980（昭和55）年12月までに刊行された、十勝地域を主題とする考古学関係のものである。
- II. 十勝地域を主題としていなくても、十勝地域において考古学的に重要な内容を含んでいる文献についても収録した。
- III. 文献の配列は年代順とし、発行年の不明なものは除外し、月の不明なものは該当年の末尾に配列した。
- IV. 各文献の記載順序は整理番号、標題、著（編）者名、書名、巻号、頁、発行所、発行月とした。
- V. 最後に内容・時期別、人名別の索引を付した。
- VI. 本目録は拙稿1973「十勝地方関係考古学文献目録（1935～1972）」『史峰』3、34～39頁および後藤秀彦1977「十勝地域における最近の考古学的動向と課題—十勝地域関係考古学文献目録—（1972年4月～）」『北海道史研究』12、45～52頁をベースとしている。また、松下亘の労作『北海道考古学邦文文献目録』1～4も参考にさせていただいた。なお、目録作成にあたっては明石博志・石橋次雄・後藤秀彦・菅訓章の諸氏のご協力を得た。記して感謝する次第である。